慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ : シニシズムを抱きとめて
Sub Title	
Author	塩原, 良和(Shiobara, Yoshikazu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.147- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

シニシズムを抱きとめて

塩原　良和

文章を書くとき、社会学者・地域研究者として「書くべきこと」と、実践者や当事者の方々から学んだことを学生に伝えるべき教師として「書きたいこと」が乖離してしまう。研究者らしく分析的に書こうと禁欲しても､最後に我慢できずにメッセージ性の強い文を入れてしまう。その結果、学術論文としては突っ込みどころ満載の代物が出来上がる。そんな悪癖は良く自覚しているが、むしろ意地になってやり方を変えなかったりもする。

拙著（『変革する多文化主義へ』）の場合､「主流国民にマイノリティと実際に対話してもらうためにはどうすればいいのか」という、本論で論じきれなかったがゆえに終章の最後に今後の課題として挿入した問いが「悪癖」の産物である。かねてからの畏友である五十嵐泰正さんはこれを､「主流国民とマイノリティが対話を始めるには、どういった社会的・経済的条件が必要か」と問うべきであったという。そして彼は自ら再解釈したこの問いに、対話の前提となる「人間を大切にする社会を築くためにこそ、量的にも質的にも、国境を越える人々の管理と選別を行わなければならない」と答える。そして「出入国管理における管理・選別とすでに定住しているマイノリティに対する管理・選別をはっきりと峻別しないままに、原理的な次元で管理・選別に対する批判を行っていることが、筆者〔塩原〕の議論展開のひとつの難点になっているようにも思われる」と主張する。

五十嵐さんの識見には、いつも本当に感心させられる。そのうえで「出入国管理における管理・選別とすでに定住しているマイノリティに対する管理・選別をはっきりと峻別」することは、現実的にも理論的にも困難なのではないか、と応答したい。

ジェームズ・ホリフィールドは、グローバル経済の諸要素（貿易、投資、人の移動）が国家をより開放的な政策へと導くのに対し、自由民主主義国家体制を維持するための政治力学が国家をより閉鎖的にするという状況を「リベラル・パラドクス」と表現した（ホリフィールド 2007：53)。これは五十嵐さんの主張と類似している。しかし、これが「パラドクス」であるということは、国家は移民に対して完全に開放的になれないが、完全に閉鎖的にもなれないということである。家族移民や難民は言うまでもなく、労働者として入国してくる人々でさえ、国益に沿うように国家が完全に出入国を選別・管理することは技術的に難しい。しかもホリフィールドも認めているように、国際人権レジームの正当性が定着した今日、自由民主主義を標榜する「先進国」がそのような人々を受け入れないことには人権・人道的見地からの批判がつきまとい、それを避けようとすれば国益（だと政府が考えているもの）に反する移民・難民受け入れを一定程度実施し続けざるを得ない。結局のところ、世界には巨大な貧富の格差が存在

塩原良和「著者リプライ：シニシズムを抱きとめて」
『三田社会学』第 16 号（2011 年 7 月）147 - 150

し、個人には居住地選択の自由がある。それゆえ人権擁護の観点からの移民・難民受け入れ論の道義的正当性は否定しがたい。

だが実際には国家は無制限に人々を受け入れるわけにはいかず、したがって自由民主主義国家は人権・平和的見地からの移民受け入れ論に対して、移民を受け入れない道義的な根拠を示さなければならない。「国益に反するから受け入れない」という論理は、国益を超越する個人の普遍的権利があるという主張と水掛け論になってしまうからだ。そこで、自国が受け入れたくない人々に「不法」「犯罪者」「テロリスト」「外国の手先」といったネガティブなラベリングをして、人道的配慮など不要でむしろ排除することこそ人道に適い民主主義を護ることになる「悪魔」として表象する、という手法がしばしば採用される。拙著でも論じたこの「悪魔化」は、現代日本社会における外国人表象でも見られる。そして重要なことに、道を歩いているだけで職務質問を受けてパスポートを見せろと言われる永住外国人や、日本で生まれ育ったのに「北朝鮮に帰れ」と罵倒され続ける在日の人々など、「悪魔化」は国境の外側だけではなく内側の外国人住民に対しても向けられる。

五十嵐さんは私が移民受け入れの選別性の強化に批判的だというが、私は出入国管理における選別そのものを批判しているわけではない。まともな主権国家であれば、出入国管理における移民選別を必ず実施している。そうではなく、国内における「人間を大切にする社会」を守るために国境で人々を選別することが「やむを得ない措置」として正当化されることの問題性を強調したいのだ。「悪魔化」によって国境で移民・外国人を厳格に選別することが当然だとされるようになれば、国内の移民・外国人への偏見も強まりヘイトクライムが引き起こされる。それが国内の移民・外国人の生活の質を低下させることまで「やむを得ない」で済まされてはならない。国境と国内を分けて考える発想にとらわれすぎると、国境における排除が国内へ及ぼす影響が見えなくなってしまう。

また五十嵐さんも認めているように、外国人労働者の流入を防ぐことが、苦境に陥った日本人労働者たちを救うことに本当になるとは思えない。仮に外国人労働者の流入を制限できたとしても企業は労働者を求めて海外に出てゆけるし、情報通信技術の発達によってさまざまな業務を海外へとアウトソーシングしている。それゆえ物理的に日本にいない外国人と日本人労働者が競合する状況は起こるし、日本人労働者のほうが職を求めて海外に流出することもある。短期的にはともかく長期的には、移民・外国人の流入を制限することは労働市場のグローバル化から日本人労働者を護ることにはならない。むしろ移民・外国人を日本人労働者の不安や不満のスケープゴートとして表象することで、ネオリベラルな経済・社会政策を遂行する政府の統治能力を結果的に温存し、民族的にも階層的にも分断された社会をつくりだしてしまう。それは対話の前提となる「人間を大切にする社会」ではありえない。グローバル化した市場で生き延びるために国境を越えていく企業活動に対して、弱い立場の人々を社会保障・福祉という国境で囲んで護ろうとする戦略は必要だとはいえ、それだけでは限界がある。人々の側にも、自らを取り囲む境界（国境・エスニシティ・ジェンダーなど）の外側の人々と対話し連帯しよ

うとする意識や実践が不可欠である。

五十嵐さんが「異なる他者との対話を可能にするために、人間を大切にする社会の条件を論じよう」と主張するのに対して、私は「人間を大切にする社会条件を実現するために対話の可能性を模索しよう」と言っているのだと思う。冒頭で述べたように、私はマクロな社会変動・社会構造の分析を行う社会学者としての問題意識と、目の前の学生のミクロな行為に働きかけることを職務とする、社会学を教える教師としての問題意識のあいだを往復しながら拙著を書きすすめた。この構造と行為、マクロとミクロの連関のあり方という問いに解法を求めることは難しい。そのなかで、私が社会学の教師としての問題意識をあえて全面に出した「つながることの喜び」の箇所を、社会学者としての問題意識から五十嵐さんが「セカイ系アニメの最終回」のようだと評したのは愉快かつ興味深かった。そもそも私はセカイ系アニメがどんなものかよく分からないのだが、あの部分の記述を「陳腐」とか「クサい」とか言ってくれる学生さんが多い理由が分かった気がする。

外国人住民支援の現場で活動する人々の「いくら支援の実践を積み重ねても対症療法に過ぎず､外国人住民をめぐる社会状況は改善されないのではないか」という焦りや無力感を感じ[1)]、現場での実践のもつ可能性を学問の言葉にして支援者･当事者たちに伝えたいと願ったことが、拙著を執筆した重要な動機のひとつである。そのために、支援現場におけるキーワードとして語られていた「協働」という概念を、主に市民運動の場面で用いられてきた「変革」という概念と結びつけることで、ミクロな行為とマクロな構造をつなぐ理論的回路をつくろうとした。その結果、テッサ・モーリス - スズキや花崎皋平など、市民運動に親和性の高い知識人たちの思想を執筆の過程で学びなおしていくことになった。つまり拙著は対話と協働による変革をつうじた共生という、外国人住民支援における理論的指針を示そうとする試みであったし、読んでいただいた支援者・当事者の方々の感想を伺う限りでは、その意図はある程度伝わっていたと思う。

しかし、自分が出会った現場の人々の切実な声を反映させようと願って書かれた文章が、別の人々にとって陳腐に聞こえるらしい。それは私が拙著をその周辺で構想した外国人住民支援現場や市民活動の言説空間と、私自身が属し、語りかけなければならない大学教育や学界などの言説空間とのズレや温度差の存在を示唆している。このズレや温度差が、他者との対話やつながりが社会を変える可能性に対するシニシズムを生み出す一因なのだろう。だが「陳腐」という言葉が、大切なのが分かりきっているがゆえにいまさら口にする必要もない事柄を意味するとすれば、シニシズムを抱いてくれることは実はチャンスなのかもしれない。それを陳腐だと思っているということは、それが大切であることが分かっているということなのだから。ふとしたきっかけで、われわれのシニカルな視線は真摯なまなざしに変わる。市民活動、NPO／NGO、社会事業、企業の CSR、大学教育におけるサービス・ラーニングなどをつうじて、対話と協働を重視して社会に働きかけようとする動きが学生や若者のなかで増えつつあると個人的には感じるし、本稿執筆時点で発生した東日本大震災以後の日本社会で、そうした動きが強

まってほしいと切に願う。

「真の社会学的再帰性が魅力に欠け、そのうえ陰鬱に見えるのはなぜかといえば、その再帰性によってわれわれの発見させられる事柄が一般的で、誰もが共有する、平凡でありふれたものだからです。ところが知識人の価値体系のなかでは、ありふれていて平凡なものほど悪しきものはありません」と述べたのはピエール・ブルデューであった（Bourdieu and Wacquant 1992=2007：105）。社会学者が陳腐であることを恐れるのは、職業病のようなものかもしれない。だが「セカイ系アニメの最終回」をリアルにするためには、われわれ自身があえて陳腐な言葉を語ることで、社会を変えることに対するシニシズムから抜け出すことも必要だと思う。またもや陳腐な結論で恐縮ではあるのだが。

【註】

1）たとえば塩原・原（2011）を参照。

【文献】

ジェームズ・ホリフィールド（山岡健次郎訳），2007，「現われ出る移民国家」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う――現代移民研究の課題』有信堂，51-83.

塩原良和・原千代子「外国人住民支援現場と大学教育の『協働』の可能性――川崎市ふれあい館を事例に」『PRIME』（明治学院大学国際平和研究所）33 号，47-62.

Bourdieu, Pierre avec Loïc J. D. Wacquant, 1992, *Réponses: pour une anthropologie reflexive, Éditions du Seuil.* （=2007，水島和則訳『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待――ブルデュー、社会学を語る』藤原書店）.

（しおばら　よしかず　慶應義塾大学）